

魏晉時代に譯されたる無量壽經について

坪 井 俊 映

一

魏晉時代とは後漢の後を受けて西曆三世期の初頭魏吳蜀の三國鼎立し、次で晉（西晉）の世祖武帝がこれを統一してより、東晉恭帝が廢され、宋高祖が位につくまでの凡そ二百年の間を云ふのである、この間西北戎狄の支那中原に遷住するもの多く、殊に東晉元帝が南方建康に都を遷すや揚子江以北の地は外戎の蹂躪する處となり、世に五胡十六國の時代と云はるる程に、外戎は各地に割居して國號を稱し、治亂興亡をくり返したのである、この間に於て東傳の佛教は次第に支那社會に根をおろし、儒教及び支那古來の宗教たる黄老の教と接觸し、時には同化し、時には反撥し

て、思想上教會史上まことに注目すべき時代であつて、外來思想たる佛教が支那社會に受容されるにあたり、どうしても經なければならぬ支那思想との對立調和の時代である。

佛教が支那に傳來したのは後漢末であるが、それより六世期初頭元魏菩提流支が印度直傳の佛教を傳へるまでは、ほとんど西域傳來の佛教であつて、そのうち最も永く支那と交通し、佛教傳播に力のあつた國は月支國である。殊に大乘佛教に於て而りである、僧傳によると月支國より來させる譯經三藏は二世期中葉より五世期初頭まで凡そ二百五十年の永きに渡りて陸統と來支し、數多くの大小乘經典を

譯出してゐるのである。この他の西域の康居、安息、罽賓等の諸國は、時には多くの譯經三藏を送つたことがあるが、その期間は月支の支那交通に比べて極めて短かく月支佛教の支那傳播に便乘して來傳したかの如き感がある。

かくの如く西域より傳來したる佛教に大乘小乘、律禪淨土等の種々なる經典が雜然として傳來されたのであるが、

これは思想的には孔孟の教、黃老の學說と信仰的には民間の諸神との間に接觸が行はれ、兩思想に少なからざる影響を殘してゐるのである、然しながら傳來當初に於ては佛教は黃老の學、方士の術の一と見なされてゐた様である、後漢書によると後漢明帝の弟楚王英は「浮屠の祠を崇ふ」と云ひ、佛祖歷代通載には、これを永平十四年として、黃老と佛とを學ぶと云ふ、又後漢書襄楷傳によると桓帝も老佛を奉じ、黃老浮屠の祠を立てたことを記してゐるから、外來の佛教は黃老の祠宇の一部として奉祠された如くである。

この後漢の末になると道教は教團を組織する條件が熟し、順帝の時に大平道と五斗米道とが相ひ前後して成立し、道教の新しい出發となつたのである。大平道は瑯琊の

道士于吉が大平經百七十卷を感得して大平道を唱へ、張陵は五斗米道を唱へて蜀の鶴鳴山に入りて道書二十四篇を造作したのである、かくて古來より民間信仰、方術信仰として組織を持たなかつた傳承の信仰を道教教團として組織づけ、魏白陽、葛玄、葛洪、張陵、寇謙之、陸修靜、王浮等の人を出したるに對し、佛教にては譯經沙門として、支謙、唐僧會、竺法護、鳩摩羅什、曇無讖、覺賢の如き大翻譯家の來支あり、學僧として道安、慧遠の如き人や神異僧として佛圖澄の如き人物をも出したのである。

かくて佛教の新思想と支那在來の儒教、道教の思想との間に何等かの關係づけが必要となり、牟子は理惑論、曹植は辨道論を著して、佛教を基調としてその優位を認めつゝ、而も儒道二教との融和を計らんとし、その他孫綽、劉勰、顏之推の如き佛教と儒教との調和説をなす經書學者も排出したるに對し、王浮は老子化胡經を作製して、老子は夷狄に入りて浮屠となると云ひ道教の優位性を主張したのである、かくて佛老兩思想は時には同化し反撥し、黃老虛無の思想と佛教の般若皆空の思想の接觸する所に世は清談の流

行となり、竹林の七賢者流は時人の渴仰する所であつた。又破佛なる教會史的な大慘事を起したのもこの時代であつた、道教は佛教思想によりその教理内容を整備整頓すると共に、佛教も亦支那思想に同化すべく經典の改竄、偽經の作製をなしたのもこの時代であつて、現存支那成立の經典と云はるるものほとんどは、この時代に出來てゐるのである。而て佛教の儒道二教に對して取つた態度は儒教に對しては常に調和的であつたに對して道教に對しては常に對抗的であつたのである。

註

- ① 魏文帝はAD二二〇年、蜀昭烈帝はAD二二一年、吳大帝はAD二二二年にそれ／＼帝位につき、國號を稱す。
- ② 本田義英氏著、佛典の内相と外相、二五四頁参照。
- ③ 後漢獻帝初平二年（AD一九一）に作ると云う（望月佛教大年表の説）、佛祖歴代通載には初平年中と云ふ。
- ④ 曹植は魏明帝景初元年（AD二三七）に寂す、（望月佛教大年表の説）
- ⑤ 中國哲學史三二五頁（狩野直喜氏著）

二

魏晉時代に譯されたる無量壽經について

魏晉時代に翻譯された無量壽經としては、出三藏記集第二新集異出經論錄第二によると、^①

無量壽經

一、支謙出、阿彌陀經二卷

二、竺法護出、無量壽經二卷 或云無量清淨平等覺經

經

三、鳩摩羅什出、無量壽經一卷

四、釋寶雲出、新無量壽經二卷

五、求那跋陀羅出、無量壽經一卷

右一經五人異出

と記す、この中鳩摩羅什譯の無量壽經一卷と求那跋陀羅譯の無量壽經一卷とは、現行の阿彌陀經及びその異譯と考へられるからして、梁僧祐は無量壽經に支謙、竺法護、釋寶雲の三人の譯本のあつたことを認めたやうである。^②

然るに隋の法經等の集録せる衆經目錄によると

無量清淨平等覺經二卷 魏世白延譯

阿彌陀經二卷 吳黃武年 支謙譯

無量壽經二卷 晉元嘉年 竺法護譯

一三三

新無量壽經二卷

宋永初年、佛陀跋陀羅譯

新無量壽經二卷

宋世曇摩密多於祇桓寺譯

新無量壽經二卷

宋世寶雲於六合山譯

右六經同本異譯

と記してゐる、僧祐（AD四四五—五一八）が出三藏記集を編輯してより法經等が衆經目錄を作製（AD五九四）するまで約壹百年程の間に無量壽經譯出者について大なる異なりを來してゐるのである、即ち、法經錄は出三藏記集の錄して居らぬ白延譯の無量清淨平等覺經の存在をみとめ、更に佛陀跋陀羅譯のあつたことを記してゐる。この法經錄は何によりて六本の異譯を認めたかと云ふことは詳かにすることが出来ないが、出三藏記集に錄せざる魏白延譯の平等覺經の存在を認め、宋代に佛陀跋陀羅、曇摩密多、寶雲の三譯を錄してゐることは、この魏晉南北朝時代に譯された無量壽經についても僧祐が出三藏記集の新集續撰失譯雜經錄第一の序に、「抑々亦凄凉には梵の成文を宣ぶるに届止

め、或は晉宋に近く出しものも、忽せにして、未だ詳かならず、譯人の闕くるは歎んど斯に由れるか」と云へる如

く、この當時より既に本經の譯者について不明の點が少なからずあつたことが推察される、更に年次が降り開元錄になると無量壽經に安世高譯以下十一回の譯經のあつたことを記してゐる、古來の傳承に於て無量壽經に前後十二回の譯あり、その中五本は存し、七本は缺くと云ふ説は、この開元錄の十一譯出説に宋法天譯の大乘無量壽莊嚴經の一譯を加へて云ふ説であるが、これはそのまま史實を傳へたものと云ふことは出来ない。

現今魏晉時代の譯出經典として考へらるるものに、無量清淨平等覺經三卷（支婁迦讖譯）と阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人度經二卷（支謙譯）と無量壽經二卷（康僧鎧譯）の三本がある、これら三本の譯出者について古來より異説紛々として定まる所を知らずと云つた状態で、無量壽經翻譯研究史が成立する程に、往昔より諸學者の手により研究されてゐるのである、然し大體に於て魏晉譯出の三本は次の如く考へられてゐる様である。

一、無量清淨平等覺經 後漢月支三藏支婁迦讖譯と記されてゐるけれども、梁高僧傳、法經錄、靜泰錄、無量壽

經連義述文贊等の説により魏の白延の譯出したものとされ
れてゐる、然しこれも出三藏記集に記する所なく、白延
の譯經と云はるる須賴經は白延譯を證する唯一のもので
あるが、この經は短篇のものなる故に譯語を比較して調
べるに充分な資料を提供せぬ、又譯者白延も傳歴の上に
於て明確ならざる點多々あるにより、適確に平等覺經を
以て白延譯と決定することは出來難いのである。^③

二、阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人度經 尾題に阿彌陀
經とある故に、羅什譯の阿彌陀經との混同をさけるため
に普通大阿彌陀經と稱せらる、これは吳月支國居士支謙
譯と記す、これは出三藏記集を初め諸經錄に等しく記す
る所であるから、この譯者についてあまり疑問はない様
である。境野黃洋氏は支那佛教史講話に於て、この譯
者は支謙にあらざして支婁迦讖の譯出なりと云ふ。

三、無量壽經 曹魏天竺三藏康僧鎧譯と記されてゐる
が、この譯者について、本經が淨土教各宗派の正依の
經典たるを以て各方面より研究せられ、その中には譯者
康僧鎧の存在すら否定する人あり、大體に於て出三藏

魏晉時代に譯されたる無量壽經について

記、法經錄等の説により佛陀跋陀羅（覺賢）と釋寶雲の
共譯とされてゐたのであるが、最近覺賢寶雲共譯（宋永
初二年、AD四二二）以前の寫經である大魏神瑞二年（AD
四一五）の奥書のある無量壽經の殘缺本が發見されてよ
り、今までの定説がくつがへされて、本經は竺法護の譯
出とされるに至つたのである。^④これを裏付ける資料とし
て天台大師觀無量壽經疏、無量壽經連義述文填、出三藏
記、法經錄、彥悰錄等の説である。康僧鎧説を主張する
のは、比較的信用の薄い費長房の歷代三寶記の説である
が、これは還り見られないのである。

大體以上の如く平等覺經は魏白延譯、大阿彌陀經は吳支
謙譯、無量壽經は晉竺法護譯とされてゐるのであるが、然
し、この説に反對する學者も存するが、しかし特別なる新
資料の發見されない限り、この説を全面的に否定すること
は困難なことと考へらる。

さればこの三種異譯本の中に於て譯經年次より云へば支
謙譯の大阿彌陀經が最も古く、次に平等覺經であり、無量
壽經はその次に位するのである。

而てこれら三本を比較してみるに平等覺經と大阿彌陀經は類似し、明す所の本願も共に廿四願であるに對し無量壽經は四十八願を明し、大阿彌陀經平等覺經が彌陀入滅觀音補處の説を明してゐるに對し、無量壽經にはこの説なく、又無量壽經の序分に普賢の徳相を説いてゐるに對し、この大阿彌陀經平等覺經はこれを説いてゐないのである、その他の點に於て平等覺經と大阿彌陀經とは類似點が多く見出されるに對して、無量壽經にはこれら二經と異なる點が多く存する、然し乍らこの三異譯經典にのみ共通して存在し、他の異譯たる流支譯の無量壽如來會、法天譯の無量壽莊嚴經、藏文無量壽經及び梵本に存せずして、これらと異なる點は卷下に明す「舉苦令厭」の一段であつて、五惡段を中心として、その前の「舉煩惱過」の章と後の「勸人修捨」^⑤の一段とである、この三段のあることが魏晉時代に譯されたる無量壽經の特色である。

註 ① 大正大藏經第五十五卷、一四頁參照

② 大正大藏經第五十五卷、一一九頁參照

③ 泉芳悳氏著、梵文無量壽經の研究。望月信亨氏著、佛教經

典成立史論。境野黃洋氏著支那佛教史講話、佛書解説大

辭典等參照

④ 日本佛教學協會年報、昭和二十四年度、野上俊靜氏著、無量壽經漢譯巧參照

⑤ 「舉苦令厭」「舉煩惱過」「勸人修捨」の用語は義舉觀徹の無量壽經合讚の科文による。

三

上述の如く大阿彌陀經と平等覺經と無量壽經の三本にある、「舉煩惱過章」「五惡段章」「勸人修捨章」の三を比較してみるに、既に泉芳悳氏が「梵文無量壽經の研究」^①に於て指摘せられた如く、無量壽經のそれは平等覺經、大阿彌陀經の文を整文したものであるが、その中、殊に無量壽經は平等覺經の文を依用したやうである。平等覺經と無量壽經との譯語を比較するに類似點が多く見出される。無量壽經に明す法藏菩薩の師佛は世自在王佛または世饒王佛とも云はれてゐて譯語に統一を缺くが、この世饒王佛なる名稱は平等覺經に用ひる名稱であり、大阿彌陀經にては樓夷亘羅佛とて梵語の音譯名を用ひてゐる。その他無量壽經の譯

語にて「即從坐起」「棄國捐王絕去財色」「積功累德無央數劫」「爲交絡覆蓋其上」「自然虛無之身」「貧窮乞人在帝王邊」「但炊唐得」「受其殃罰」「得生王家自然尊貴」等と記するは全て平等覺經の譯語である、そのみならず歎佛偈（光顏魏々の文）を見るに大阿彌陀經にはこの偈は略されてゐるが、平等覺經には存し、兩者を比較するに、平等覺經は五字一句であるに對し、無量壽經は四字一句で、形式の上に於て異なりは存するが譯語用語がほとんど同一である。兩者を比較すれば次の如し、

平等覺經

無量出光曜 威神無有極
如是之焰明 無能與等者

(中畧)

如是精進力 威神難可量
令我爲世雄 國土最第一
其衆殊妙好 道場踰諸刹
國如泥洹界 而無有等雙
我等常愍哀 度脫一切人

無量壽經

光顏魏々 威神無極
如是焰明 無與等者

(中畧)

如是精進 威神難量
令我作佛 國土第一
其衆奇妙 道場超絕
國如泥洹 而無等雙
我當哀愍 度脫一切

魏晉時代に譯されたる無量壽經について

十方往生者 其心悅清淨

已來到彼國 快樂喜安隱

幸佛見信明 是我等一證

發願在於彼 精進力所欲

十方諸世尊 皆有無碍忍

常念此尊雄 知我心所行

令我身止住 於諸苦毒中

我行精進力 忍之終不悔

十方來生 心悅清淨

已到我國 快樂安隱

幸佛信明 是我眞證

發願於彼 力精所欲

十方世尊 智慧無礙

常令此尊 知我心行

假令身止 諸苦毒中

我行精進 忍終不悔

上段の平等覺經の偈文の中、横に縦線を引いたる所のみを取り出せば下段の無量壽經の偈とほとんど同様になる。

更に「東方偈」について見るに、これと同じことが解る。

平等覺經

其奉事億万佛 飛變化遍諸國
恭敬已歡喜去 便還於須摩提
非有是功德人 不得聞是經名
唯有清淨戒者 乃逮聞此正法
曾更見世尊雄 則得信於是事

無量壽經

奉事億如來 飛化徧諸刹
恭敬歡喜去 還到安養國
若人無善本 不得聞此經
清淨有戒者 乃獲聞正法
曾更見世尊 則能信此事

謙恭敬聞奉行 便踊躍大歡喜
惡驕慢弊懈怠 難以信於此法
宿世時見佛者 樂聽聞世尊教
譬從生盲冥者 欲得行開導人

——中畧——

有信慧不可致 若聞見精進求
聞是法而不忘 便見敬得大慶
則我之善親厚 以是故發道意
設令滿世界火 過此中得聞法
會當作世尊將 度一切生老死

謙恭敬聞奉行 踊躍大歡喜
憍慢弊懈怠 難以信此法
宿世見諸佛 樂聽如是教
聲聞或菩薩 莫能究聖心

——中畧——

人有信慧難 若聞精進求
聞法能不忘 見敬得大慶
則我善親友 是故當發意
設滿世界火 必過要聞法
會當成佛道 廣濟生死流

この横に棒線でしるした處が、下段の文と同じ所である。然しこの光顏魏々の文並に東方偈は偈文全体が類同するのでなく、類似せざる所もあり、今は煩をいとはず類同せる文を對照して出したのである。この例を見ても無量壽經は平等覺經を參照して翻譯し、梵語の意味の同じ所は平等覺經の文句をそのまま流用したのであらうと思はれる。

この例は竺法護譯の普曜經にても見らるることで、呉の支謙譯の瑞應本起經とこの普曜經とを比較してみるに漢譯

二經の中に於て、一字一句の相違もなく、全く同文なる箇所が多く見出される、これ凡らく竺法護が普曜經を譯すにあたり、前代の譯出經典を參酌して、意義の同じ所は前代の譯文をそのまま使用したものであつて、これ竺法護譯經の一特色と考へられる。^②

従つてかゝる點を考へて無量壽經の「學煩惱過章」以下の五惡段の文の大阿彌陀經平等覺經のそれに類同せるは凡らくこれら二經の中等覺經の文を整理整文したものであらうと思ふ。

註 ① 泉芳瑛氏著、梵文無量壽經の研究、一一七頁參照

② 國譯一切經本緣部九、方廣大莊嚴經の解題(常盤大定識)

六頁參照

四

然るに平等覺經と大阿彌陀經との五惡段を見るに既に荻原雲來博士、望月信享博士等が論ぜられた如く、この五惡段を中心とする一段は支那にて附迦されたものである、望月博士は佛教經典成立史論に於て、四天王經、三品弟子經

と平等覺經大阿彌陀經無量壽經の五惡段の説を比較して詳細に論述され、「三品弟子經は三寶記に呉支謙譯と傳へてゐるから、或は支謙が彼の五惡段の文を作つたのかもしれない、それにしても時代が聊か早やすぎる觀がある。出三藏記集には三品弟子經は失譯にしてゐるから、今の五惡段も東晋の頃、或る好事家が製作して、これを前二經に追補したのではないかとおもはれる」と云つてゐられる。誠に博士の言の如く大阿彌陀經、平等覺經に於て附迦され、無量壽經はこの中平等覺經によりて、その文を添附したと考へられるのであるが、この大阿彌陀經、平等覺經は何れが先きで、誰人によりて添加されたかは明らかにすることは出来ぬ。

而て五惡段を中心とする一段の思想は社會道德に異背する五惡五痛を明し、これに對して佛の五善をすゝめて、その利益を説いたものであるが説相の次第に於て、前節に於て淨土に往生したる聲聞菩薩の所有する功德の無量なることを明し、次いで經は對告衆を替へて彌勒菩薩を對告衆として、「往生阿彌陀佛國、橫截於五惡道、自然閉塞升道之

魏晋時代に譯されたる無量壽經について

無極、易往無有人、其國土不逆異、自然之隨牽、何不棄世事、行求道德、可德極長生、壽無有極云々^③と云ふ、記すところの「極長生壽無有極」とはこの文にては極樂淨土の無量壽のことを説くと見られるが、かゝる表現を以て無量壽を示す所に支那的な考へが見られる、又令持五善得共福德世長壽泥洹之道」と云ひ長壽なる言葉はこの五惡段にしばしば出て來る語であるが、この長壽なる徳目は「富貴」と云ふ徳目と共に支那人の生活理想であつて、特に長壽は重要視されるのである、又長壽、多子、富貴、無病、官吏（又は壽、富、康寧、収好位、考終命）を以て五福と云ひ、幸福の徳目とし、短折、病、憂、貧、惡、弱の六を六極としてこれを忌み嫌い、この五福を得る方法として種々の方術を尊んだのである、又支那社會は何れの原始宗教でも同じであるが天地自然現象に對して、神靈の存在をみとめ、鬼神畏懼の考へより日月星辰山川風雨等を全て神明として祀り畏れたのである、抱朴子内篇卷六微旨に「天地に過を司どる神あり、人の犯す所の輕重に隨つて以て其の算を奪ふ、算減すれば貧耗疾病ありて屢々憂患に逢ふ、算盡くれ

ば死す、而て算を奪ふべき者數百事あり、具さに論すべからず云々」と云ひ、「又身中に三尸あり、三尸の物たる皆な鬼神の屬にして形なきも實に魂靈あり……………庚申の日に到ることに、輒ち天に上りて、壽命を司どるの神に人の過失を告白す、又た月晦の夜には竈神も亦天に上りて人の罪狀を白す云云」と云つて、人の罪過を録する神のあることを記してゐる。これは五惡段に於て人間の道德の規準を神明にもとめ、「神明記識犯之不貫」「魂神精識自然之趣、天地之間自然有是」と云ひ、神明が道德を犯すを許すことなく記録して罰することを明す如きは抱朴子に明す神の考へに相ひ通ずるものである、かくの如く道教的な考へが、これに入つてゐるに對して「皆敬受推讓義、謙遊前後、以禮敬事、如父如母、如兄如弟、英不仁賢和順禮節」と云つて、人倫の道を説き、禮、仁、賢等を説く如き全く儒教的である、然し乍ら五惡段には明確に五倫五常の徳目は見出すことは出来ぬが勸人修捨の段に於て經戒奉持を明して、

「即ち君改化して、善をなし、齊戒精思して淨自湔洗し、端心正行して位に居して、嚴慄に教勸し、衆を率い

て善をなし、道德を奉行し言令をして正ならしむ、臣その君に孝にして忠直に受令して、敢て違負せず、父子言令孝順に承受し、兄弟夫婦宗親朋友上下相令して言に順ひ理に和し、尊卑大小轉々あひ敬事するに禮を以てし義に如ひ、相ひ違負せず……………自然に善をなし、所願輒ち得、咸く善く自然の道を降化して不死を欲することを求めば即ち長壽を得べく、度世を欲することを求めば即ち泥洹の道を得べし」^④

と云ふ如き、孝忠敬禮義等の徳目を明してゐる。然しこの文によりても知る如く、經戒を奉持する功德として長壽を先きあげ、泥洹の道を後に明す如きは、当時の支那民間信仰に同じたものであらうと思はれる。

註

① 萩原雲來氏「無量壽經の研究」望月信享氏著「淨土教の起原及其の發達」津田左右吉氏「シナに無量壽佛と云う名の用いられたことについて」等の論著參照

② 大阿彌陀經下卷（淨全一卷一二八頁）

③ 抱朴子内篇二（道教聖典、世界聖典全集所收）一四八頁

④ この文は大阿彌陀經の文なるが無量壽經には略されてい

五

さればこの五悪段並にこれに關する前後の章段は誰人によりて作られたのであるかは適確に示すことは出来ないが、無量壽經は平等覺經の文を整文して成つたものと考へられるから、平等覺經及び大阿彌陀經の何れかへこれが添加され、他がこれにならつたものと考えられる。従つて先づこれら兩經の譯者について考へて見るに平等覺經を譯出した白延は曹魏甘露二年（AD二五八）頃の人であるから、竺法護より約五十年程前の人である、亀茲の生身者でその活躍した所は北方支那であるが、傳歴明確でないから、その業績思想も充分に知ることが出来ないのである。①大阿彌陀經の譯者支謙は傳によると月支人を祖先にもつた支那人で、支婁迦讖の弟子支亮に受法し、漢末獻帝の時、難をさけて呉地に走り、呉主孫權の寵を受け、華戎語を善くするを以て、衆本を収めて漢語に譯した居士である、その活躍した所は主として呉の建康であり、晩年竺法蘭道人に従つて更に五戒を練ると云ふ、高僧傳には「呉地初染大法」と

記す如く、支謙によりて初めて江南に佛教が傳はつたのである、然しながら支謙は居士であり、支那人であつて、外來の讎經沙門ではないのである。呉地に初めて浮圖寺を建てたのは支謙より少し遅れて出たる康僧會である、高僧傳には呉地に沙門を見たる初めと云ふ。この兩人によりて佛教が江南に傳播したのであるが、葛洪の神仙傳によると道士葛玄は呉の大帝に相見えたことと云つてゐるから、葛玄も大体支謙と同時代の人であることが知られる。凡らく彼もこの地に於て道教信仰弘通のため努力したのである。この時代は相ひ前後して五年米道、太平道の成立した時で、道術信仰の極めて最な時である。又支謙の譯出經典の譯語を見るに道教的儒教的用語が見出されるのである。瑞應本起經を見ると、

「或は聖帝となり、或は儒林の宗となり國師道士となり、所在に變化して稱記すべからず」

と云ひ、又佛說菩薩本業經に、

「或は佛を名けて大聖人と爲すあり、或は神人と號し、或は勇智と稱し、世尊と稱し、或は能儒と謂ひ、或は昇

仙と謂ひ或は天師と呼ぶ云々」

と云ふ如く、儒林の宗、國師道士、能儒、昇仙と云ふ如きこれである。又支謙は晩年穹隘山に隠れ世務に交らず竺法蘭道人に従ひ更に五戒を練ると云ふ。この竺法蘭道人とは如何なる人か不明であるが、竺の姓を冠する所より西域の人ならんかと思はれる。然しこの人を沙門と云はずして道人と云ふは或は道教的な神異の優れた人ではないかと思はれる。この人について五戒を練ると云ふは、五惡段の五善五戒の思想を連想せしめるものがある。

更に出三藏記集の康僧會の傳によるに吳主孫皓（孫權の孫）との問答に左の記事を示す。^③

皓問ひて曰く、佛教の明す所の善惡の報應とは何者か是なるやと、會對へて曰く、夫れ明王、孝慈を以て世を訓ふれば、則ち赤鳥翔りて老人見はれ、仁德をもて物を育くめば、則ち醜泉涌き嘉禾出づ、善既に瑞有り、惡も亦之の如し、故に惡を隱に爲せば鬼得て之を誅し、惡を顯に爲せば人得て之を誅す。易には積惡の餘殃を稱し、詩には求福不回を詠ぜり、儒典の格言なりと雖も、これ即ち

佛教の明訓なり」

と云ふ、この問答によつて知る如く康僧會は江南吳地に初めて佛教を傳へた沙門であるから、儒教道教の思想と常に何等かの關連を持つて佛の教法を説かざるを得なかつたのである、而て同傳に、「會、吳朝に在りて亟は正法を説きしも、皓の性凶兇なりしを以て妙義を説くに及ばず、唯報應の近驗を敍べて以て其の心を開諷せしのみ」とありて、吳地には淺薄なる因果應報の道理のみしか通ぜなかつた様である。吳地はかくの如く佛教には未開の地であつたからして、康僧會に先立つて佛教を傳へた居士支謙にありても、これと同様な状態であつたことが想像される、而て彼は支那思想に育つた人であるからして、阿彌陀佛の無量壽に關連して、長壽泥洹之道を明し、世間の五惡五痛五燒の因果報應の道理を説くことが必要では無かつたかと考へるのである。かゝる點より考察して、無量壽經の五惡段並にこれに前後する一連の章句は、大阿彌陀經翻譯の時に増加され平等覺經にこれが受けつがれて、竺法護が無量壽經を譯出するときに、この平等覺經によりて更に整文して添加

したものであろうと考えるのである。

(昭和二十八年度文部省科學研究費による助成研究の報告の一部である)

註

- ① 白延は魏の甘露二年(AD二五八)洛陽白馬寺にて平等覺經等を譯出したのであるが首楞嚴經後記によると咸安三年(AD三七三)涼州にて月支の優婆塞支施耑が「須賴經」「首楞嚴經」「上金光明經」等を誦出した際、これが翻譯の任にあたつた人に帛延あり、白は帛と混用されることがあるから兩人は同名である上に翻譯經典も同じものが少なくない、この兩人は年代が距りすぎてゐるため同人とすることは出来ないが恐らく「首楞嚴經後記」の筆者が支施耑の譯出經典が白延のものに類同する所より誦出を施耑、譯語を帛延としたものであろう。
- ② 出三藏記集、第十三、梁高僧傳、卷一
- ③ 梁高僧傳の文これと同じ